重刊

日本歳時記

秋

イ 13
721
3

門 4 13
221
巻 3

日本紀時記卷之九

秋

漢書律曆志ニいはく秋ハ物ヨリ起ル然ル後ニ成ル故ニ言フ物ヲ熟ト名ケ成ル也ト云フ物ヲ秋ヲ名ケ成ル也
しはあきはくるとはるとあきとのあはひなり
氣ハ春ハ東方ニ氣ハ夏ハ南方ニ氣ハ秋ハ西方ニ氣ハ冬ハ北方ニ
なりはるとあきとの中ニ夏ハ土ニ
花ハ春ハ木ニ月ハ秋ハ金ニ

素問ニいはく秋ハ二月ニ氣革ル
地雲ハ清明ニ風ハ生ル
俗ハ世ニ志弘シテ安寧ニ
氣ハ收斂ス
外ニ
秋ハ二月ニ氣革ル

逆上の病を腸氣とも腸澼とも食滯とも
書とも論ずべきなり 夜乃末秋の初穀とるる 喜
ぶ時衣をぬぎ裸にして涼と貪るゆえなれ五
臟の腑完皆背に命じ人をして靡めく
風と取又穀を是と霧せば風背より入中風の
源なり故如これを治し先ず疾所を
見べしは八味地黄丸と服すべし 二白とは葱蒜
月令廣義に曰く 秋に揚花穂
ふ事なれ
穀を稼ぎ稼ぎ秋氣を燥ぎ宜く胡麻を食し
てろれ燥と潤とべし
書に曰く 海に入ては事を為ざるべし 風
疾或瘍と号ふ新穀初て熟し 故老人
これとくべい寒疾と数す 新果を食べい風寒と動ふ
時をうして 又早稻の米熟せ
ば香美なり 志れて 寒疾と
変じ瘍と起す 脾胃をやぶる 新穀を二日
ぐりとれば 病人は苦しむ
月令廣義に曰く 秋に 老人稽留人は新
書に曰く 覓べい微火と用ふ是をあぶるべし 大す

[illegible]ひとかん
小見れとやく火を[illegible]へりす
[illegible]ハ[illegible]水とのこ[illegible]
衣服と[illegible]書と[illegible]
金賈要異よいとく秋九十日[illegible]ハ脇と食へり[illegible]
書東垣のいとく古人の云秋薑と食すれへと[illegible]
[illegible]氣と[illegible]心脇[illegible]又秋薑い人の
天年と[illegible]
[illegible]薑と食[illegible]
[illegible]と減す

七月 秋の七月の異名[illegible]八月の中 ○七月の異名 [illegible]月 [illegible]
[illegible]律と夷則と[illegible]
[illegible]

六日 沐浴

七日 七夕と云又[illegible]

七月七日織女牽牛[illegible]
五[illegible]織女牽牛の事[illegible]
[illegible]言と[illegible]
[illegible]人女の[illegible]
[illegible]
[illegible]

せり鰤に鯯鰤と云ふ魚し此事如くやまとに
は久しくもあくまりてん何ろ人を聚て奏せさ
せ可やもへ乞巧奠の料とし給りげよ此變
織りと此りへの名を牧名へ乎乃れ甚しきおりて又
此事なりと云ことをれを如きにこれといふやうち
いぞぐ天と抄されざる乎り索餅代菓子風抑
乞巧奠乃料を饗饌かりんあるん人も
此事ぞえにも河りねりし又夜なる夏ふ夜なれを
二星あい河と云ふハ異聞雑記よ七月七日乃夜紙
濃源氏とかるすがともおやすり紛えおかりや

七夕乃うる　万葉集よみ人しらず
河よ此川氷り若菜の旋風にてひくとこれは時もうき来
古今集　凡河内躬恒
年ことにあふとハすれと七夕乃ぬるよの数そ少なかりける
また　藤原興風
契りけむ心そつらき七夕の年にひとたびあふはあふかハ
続拾遺集に　権大納言実家
おりしかむ心もそらの天河あふせハ年に一夜なる風の
新拾遺集　前関白左大臣
いく秋を絶えすちぎりや七夕の

新撰拾集より　為治親王

まれびとの水をあらしと女乃花を奥ゆかしなれハ

七夕乃為　杜牧

雲漢月地一相通　来往経年別恨多　最恨明朝波軍雨　不教回脚渡天河

又　晏殊

雲慳雨悪斗柄横　鵲橋長夜　烏慢　鵲橋長夜　偏　姑河漫　一水還無有　変時

又

織女牽牛双扇開　年年一度渡天上

猶おもひ　狂勝人間去不回

○今日素麺とくくゝ車ゆう十節記ニもとくむすう　敦煌氏乃説ゑ七月七日ゑ素麺すゝ垂　思和とけう人々瘧病とやまゝむろれあ日ゆはねゑ素麺とゝろゝ　少ゑ素日ゑ為ゆうく素麺とくくゝろの垂とまゝ　人ゝこれ日素麺とくくゝ瘧病とうれえハ

世伝たゝかなゝ　とゝす　邪走瘧い外風を　異濕ゑ感し　内飲食色慾ゑ傷られて病のうめく　内傷ゑ夏　傷於異　秋為瘧　瘧ゑ見えゝり　ゝれハ

よく攘せハとのゝ　ゝれうとくなゝ　たゝひ出

日素餅と食したまぶくして病根流去ぶしゝ分ハ
それ数とまぬるゐ事なんや決してこれ
なし　世の人かゝる高言を作をへうし
○今夜二星と寄るとて瓜果とゝのへ食物をまう
書記ことゝ多人等の内ゝしい五色の糸をつゝ針をも
ちゝ男女ゝ物ゝ技能等の稽古といひ乞巧奠
と名所
奠と申なり或脳と賺しゝ書ゝとさしゝ事
ゝ申事白居易ていこ天寶勝宴七夕にてゝ
しゝ云事根源より見えたり織女星の織機延喜式
又
七夕星ゝ名所を等乃義と祝ゝまり

て機乃業よりくゝる新勅撰集の哥
世まよの秋ゝゝのゝ夕ゝ新嶋ゝ機ゝ
乞巧奠乃事 年中行事 花風土記 ゝ見えたり
又ゝれ姫久しゝ事なりゝ
たゝ事ゝ
乃ゝ事ゝ
の間ゝ
流感を
今年集より
七夕乃書ゝ

[illegible]
天上紙屋[illegible]万[illegible]書数署新秋[illegible]
[illegible]人間[illegible]巧[illegible]

[illegible]七夕[illegible]

[illegible]牛[illegible]

人間[illegible]人[illegible]

○今日[illegible]と合せ麺と[illegible]
たりは[illegible]と[illegible]七織[illegible]
又角[illegible]書[illegible]
[illegible]塾[illegible]

十二日　二日より今日まで乃百[illegible]日[illegible]
[illegible]塵と[illegible]と[illegible]
[illegible]元[illegible]塵[illegible]
[illegible]塵[illegible]
[illegible]
[illegible]
○[illegible]乃[illegible]
[illegible]酒[illegible]
[illegible]今乃世[illegible]
[illegible]

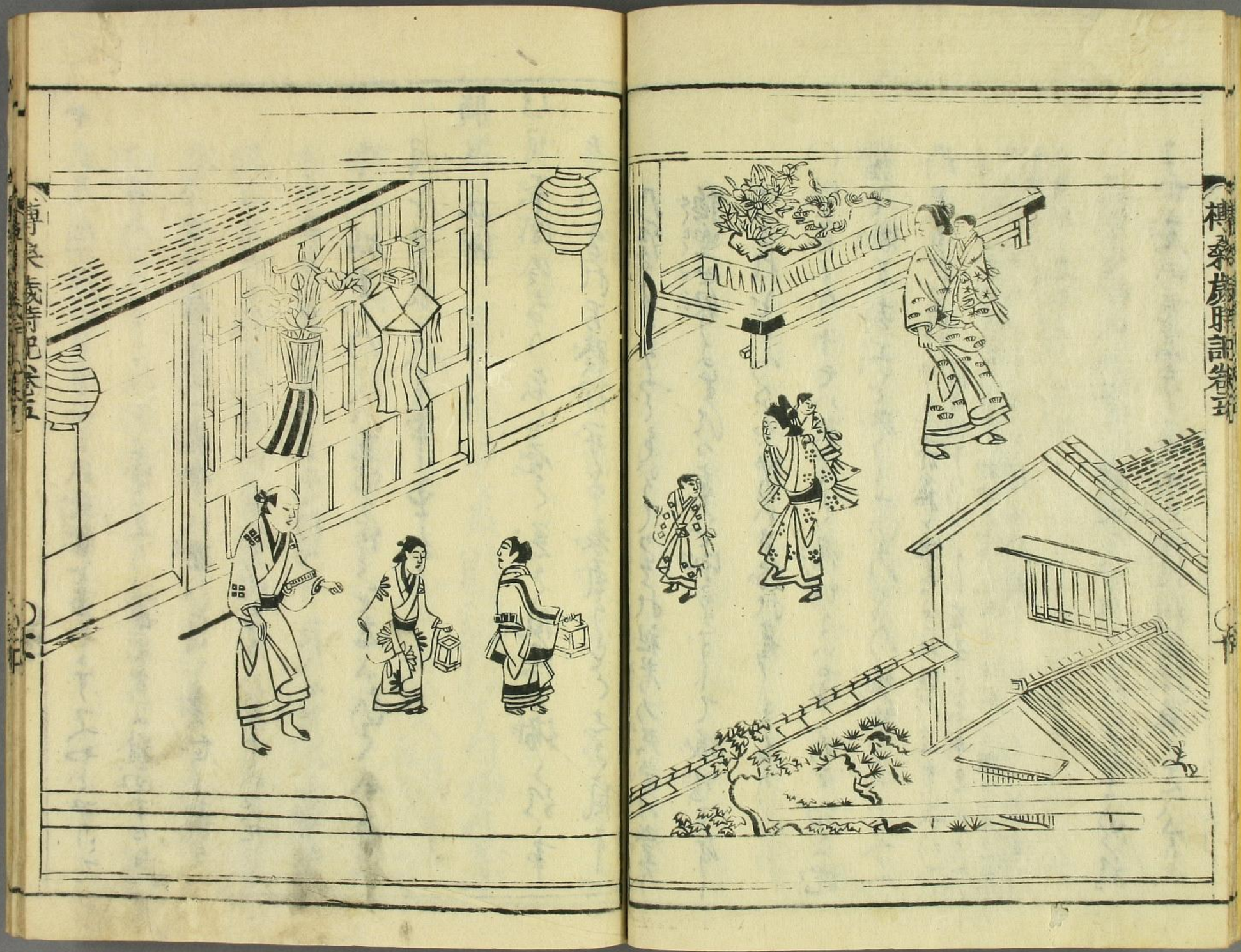
おこなはれしことのもと絶たるべし
○今の世俗ハ人なれ魂のまつる事をしらで火を燃し
いかにもおかしく遊ぶる事の愚夫愚婦をまどはせむるに似たり
士君子たる人を詳しく察せざるや佛氏の説に
まどひ家々をして親祖先の神霊来臨すとまねきて
かゝるよしなき事をなす人多し いと口惜き事なり
これ皆信られバ五雜組にも中元の盂蘭盆経と称せ
しむ縁なる人冠服を着く以て門外に出ると望く
揖譲し神を拝して入る毎年又これを送て其家迎
乃像と成よしいはれたる誠にむかしとかはらざるべし

まことにかゝる事の待ふべし
十五日　今日を中元と云 國俗蓮葉飯を製して来客
に饗し親戚にをくる事
（梅を成ミに事物紀原に云今世七月十五日僧尼作盂蘭盆本目連事五日僧俗作盆于仏前之本目連加後代廣為華飾乃至割木割竹極工巧也今人以竹作盆以為鬼神銭果食盤目蓮救母畫像祭祀之）
又こゝろある父母生存の人ハ墓を掃除し今日墓参と
称し此夜今日墓前にて燈籠を燃す（月令廣義に本元夜墓に燈して亡魂を照す）
絶るをこれにゆるやうに 先祖考妣代霊牌と
かけて飯食をそなへ酒果をさゝげて祭るなり先祖を
又此夜ともしや養番鉢に七月十五日祖先を供養し
墓食して墳墓と称すとて是れ浮屠乃説に志たがひて

如くなるこなること久しくして聖人乃
道をもてこれを世に稚義なり西遊の志行人ハ多くは
さる人有 朱子の云く 鞠躬 恭敬の貌 行 行者 [illegible] 月十日 [illegible] 用
をして伝ふ去てさるんとなるこい生人乃墨を絵食と
なる人墓所ゆく弟子墓前に焼籠といふ物すし
実紙を墨をあつに食となる人陳蔵にして紙を
をもいかしてこれすんうこれ法元 今夜を世語きそりて新
をきくい墓をひらく弟子親族の人ハ人ハ人の知て
まえ紙あるこ人をきしきうるかつをもやを紙人
をうしまうをもりてたりこ遊をるこ人吳家人

元家時代流行をうれまうとうしかを事多し中
ゆを七月十五日盂蘭盆の法会仏経よりの事
目蓮母と救ふ事と云ふこうろ元来ハ老
学者学記よりうを南歌中元を素麺と先紙て
うを人作と如く盆手盆の形よきうらへ紙後とこ年
母作へこれを作りさ紙と付くやきてこれ
作ふこ方渇と見ふく冬氏家脇と云ふこれと盂蘭盆
をいふ又美義報ふを作といふく所てこ脚いかし
ふ小織焼富きをと盂蘭盆をいふ又米紙と使人
て先紙と言ふ一秋氏家事と告ふこうり言いけへ

ましい風俗とかや云へれハ如此の事とも多く志るし
浮屠氏目蓮の事ニ附会して云傳へ盂蘭盆経
なといふ書を作りて愚俗をあざむくにや我國
にて盂蘭盆の供養をとり行ふ事ハ聖武帝の天平
五年に始るとし續日本紀に見えたり 本朝
の事ハ諸家の考へ并に年中行事大綱を
きてそしや是死れ法の事を始む玉ふとて是又一尺おかくよ
○五雜俎ニいはく七月中元の日ハ盂蘭盆会とし目蓮か
母餓鬼道に沈み苦しむを救はん為に功德を修し餓鬼に
志く食をあたふるといひ世にいふむとをり世俗たゝひ浮屠
の説にまよひて是をいふて祖考の天堂に登り
極楽世界に生るゝ事と定めずして餓鬼になし
てこれを祭る事いかにも甚しきなり
○晩青より十七八歳まての女の子を扮て
鏡を懸す教工を致して出くの俗納をとらふ人
乃見るにこれ
中元に此鏡を懸ることは後堀河院寛喜の比の
様に始まりしとし家乃初中元下元ともに鏡を懸るとも
乃さそくそりしとも浮説の間にしちくちゝめてもと
やめくるとも
五雜俎に見えたり
○又七日世俗に施餓鬼と世次といふことを
まや唐の百家志に中元日佛供羅漢盂蘭盆と見えたり



十六日 陽炎 二日男女ともに遊楽と書しるす又やどかりとて
奴婢乃いとまひとこひてく家こゝろのまゝ母兄弟又親族するなり
しかるに春夏の春壁に遊ひ月と書て秋の
秋三月をとゝ月八月は月代書るなり八月十五日九月
十三夜を月と書するなり七月乃三夜朝
たり 奴婢乃人ハ来盆の休みとて今度代
月と書なとへ事あり
晦日 法華
此月和漢冷なり 夜と雲くもく風強く雨降事
なれども万物発育多き表氣うとく去く風て

感じ中乃 表感冒傷寒を瘧嗽喘急乃病ゆる怪
てこれと逢へし
此月麦稈と実とく稈漆と麻乃八月より九月へ 稈代幕
と云切るとく搗 稈麦稈と次 新米を合入 尼今屋義こハ
かくあるとく水多くれハ 稈を中ゝ水多くれ
ちゝふうすく三くけ 搗と入臼一夜日と漬てこうこの
ちゝりけと取ることとすれ元と一夜ちゝでひるなり
又ちゝりたるかすに水とひたりかとへ元と夜日
漬て宮ちゝ第日ちゝりの元二番ちゝるり者別と
蒸と入臼へし元稈漆を久しもとけハやきく城
ちゝれたり 臼と入て土と混 土と混きこと紙如りつへし

又桶の竹箇にてくゝ池よりひて置きよう又変い桶へ
板をもつ間ゝ〻うべ高ぶ氏滅る法くゝ若板をへたらこの
上へ面蓋をして書れごとくかてゝ、さくし妙法をとれい
やきに取おす時ゝ五氏をたりに元とたきろ生ろう取出し
あくゝあい詮とさすすあり又桶よ入ゝろ生と人八名々
通ゝ黄麻ゝ重い勅揺して拾せす
天氣好時ゝ氏蓋ゝ時添ゝくゝ奴僕ゝ命ゝ志ゝ家ゝ
他ゝ出ゝ蓋法先蓋ゝ より表面ゝ氏ゝ紙ゝ表ゝひ
ゝ打蓋ゝ水ゝ大ゝ氏紙のゝとひて法ゝ
ゝ氏ゝ生ゝ中ゝ用ゝ及ゝ表ゝ

金紙にて包ゝ日ゝ表ゝひゝ表ゝびのゝ又い中ゝ表ゝ
ちぶ加ゝてのゝ表ゝ表ゝ法ゝ表ゝ生ゝ表ゝ
ゝとゝ表ゝ表ゝて表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ
て一ゝ表ゝ表ゝ焼紙のゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ
樂屋ゝ表ゝ表ゝ　上ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ
ゝて細ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ
ぶゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ
て表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ
くゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ
ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ

さく二返目をそこなはぬひろごるぬれくわさうざう紙
のたゝみかたとひさくわさうざつぎ紙とりごんしよりう
ひろをさくをけとをさくをさをとひとずして紙をを
つ付ぬるとこゝたのをきやうよくと付合古時又
作ようつもりたやう物てんてと地の紙をもり付て
う一つぐさの茶をどしてもり付をうし二返目を
同ものをり紙をりをかゝを無交肉と地をしく表をと
引て大はどくを合ごんたのこくして紙をもりが
四枚紙付合ごるをもりをもぶと引て紙をりとやよ
つをよりあけゝ紙をりのかゝと肉よ返して紙をり付をて又
加のくあるをたゝ方乘と上不一面んをり付ごをたれて
らくしてをもをしとめあまし新とぬき趣樣平返
てをしのあをりごる紙よをもをと引地りてよ返して結
をり付趣樣乃上不ごるをきをもをををごるつげ紙しをを
付をく後日よりはしかりて後ようをもぶと二三てん
引毎度平へし加編をを地りて一度よをもぶ引へり次
表ひをく後裏よをもぶ引かりはく
海上よりてよりをもふくををとをもふ和加よひろ
け鬱をを敷へし
立秋乃後花乃蔓菁蔓蔔蔓芦乃種を蒔へし要を

よりて宅中にうゑ菘蔓菁とつゆくまけハ家食なり
去ゝ八月の後まくゝし蘿蔔を出すくなし これを
ちやくあぐれた根みしし七月初まくゝし蘿蔔幸
蘿蔔ゝ蘿蔔と同時にまくゝ出それハ根ゝし
宅かゝハ出をくなしつゝく蔕てゝし 胡蘿蔔と正月
乃初まくゝをすなり大蔥小蔥等ともゝ大蔥ハ葱
とわゝちゝ名小蔥ハ根とゝ
ゝ月の末まで皮と性むを法 まゝ橋と取たりゝと去皮
と性 ゝ性す

食ハ貝と揚す麻猪をとくゝハ氣をとゝ喝豊ゝ作りゝと言す蛙と
とくゝハ祇事とゝ姫の息勢と多く食ハゝと傷り
蕎と食ハ氣とゝ食ハ暴雷
乳を蕎ゝ生薑と食ハ多く食ハ暴雷
と揚す立秋乃後蕎餅及水渋餅と食ハ祇氣
去秋ゝ後十日瓜と多食ハ月令廣義秋令
去七月要蕎麦くゝを冷水と多く食ハ
歯時書なくこゝも後日ゝ動りて病と生す又七八
月乃月漸事ゝ動ゝ刻の時節生冷乃物墨等
と多ゝ食ハ陰邪乃氣内ゝ滞りて瘧癎とう

主人怪しく思ふもことわり成

七月八日に成候者一陽風雨者二日雷雨者三日霧者
六日秋のこと候ゆへ者四日霜者五日雪
始肅者六日木乃登者七日雪者
立秋五千六刻十分夜四千三刻五千分夜四千刻
五千四刻十分夜四千刻五千分

八月 八月の節秋紋八月の中の八月の是乃仲秋 背月
橘素 紀と書とも月と
とも月と
八月の初つかたを月とも月と
八月と

翌日信夫八郎と云ふ人なりけるとそ人は物と遊戯のとき
事ありしなる根源よりとくこれをもて知なし又
西海の事をあらす世俗の風儀なり或假名記は建長後深
第の帝乃年号 乃時より山事ありて先八田のとそ人は
と称数ありしかとも人乃とそ人は行つかまつる
とかく又発明る大関氏又永の記は世七八年より
弾は天下に法命せりしのち独り諸は建長氏
法乃事なる人きり或は後嵯峨院ゆへ是言小
て加藤通方氏等乃四年ありし時正国言とも
さ先ア さ先とくを乃男女者は なりけり は後
者は 乃聖 とりて女房ひ八九嘉 ありとて

内に流さるゝあり きるゝ事を見て伊尹備へ下りけれハ至ル堂
をたつかたの事なりしまゝ吉安えしまりけるの年
紀見習明あり是を人ハ後漢献帝の治世此時
よりけるなるへしこすや然るに今年中絶 此比
武しけれる事强者ありと此之をはこれ様に世さの
つるよりて伊勢ある事となる坐ハ年代後に大きにかんく
好く海としく貞夫ある事かえくある遊覧くほあ
ますで西之文 明ハ御集物語にえくほありとらの
ありさ南むれむの流ととしむしハ流してまの
此津ハぶりしと小松乃そしとさる人ゝまてやおし海拾

しはたくまつりつゝ先さくは代にはり世 たまふてき 踏
宣公乃すゝくを此世を移たるくさつくりし方り
われ世よろへてくま流りやくされもちるたすこにし
らやそてすつりて ある回鹿のつきまくり一所乃
あつりありこれ事はうりまつるの文こゝ月まとこ
おうつくかをやうしとこなえ御くせしそこれ事なく
此事なくまつり游よろしハかをやうそてまつり後
とり流之人あれと今そそうれをくあへてなく
まつる事なり
今案るにたれこの如くりなつまで完さて御筆

の御祝儀ようなる事にて始まる事長久しきよ
てうなん侍りとぞ延喜式に宗像神社に足
元沢まるく酒史まるく物語りそれはいづれ見て
侍り給いる事根源の祝をやすいとなんしまて
近世りてこれ侍る色の心事物語と必ず書るる
ようなる御書なるべんの勅命をとゝう侍り事実
をそなへまぬるの条しかるに今此書に引所の考に
御人号のまた又今ひそかに世に秋の西穀の名のる
といふ説あり四のまれつゝちとつゝ年りて
きりまと、月朔膳となす侍るをもと膳膳といふす

月令廣義潛確類書ちなるに足くこり膳は西穀の新
なりと侍る条此ちなる八月朔の祝儀をも
不都世ら事なるべし

○今日　将軍家より御祝ひ又　御年寄
より色々の祝ひ物ありつゝ
十四日　明夜の法時くるとさそれば
黄ばみ〳〵法明後の八月十四夜侍る
銀屋世〳〵考霊時垂の玉簾初と欲国味法橋志賀
宣生黄明夜法時来可

十五日　中秋といふ秋九十月九日中ちなる事なり国俗

今日八幡宮へ参り申候ハ敵味方共に人
皇百十四代元正天皇の御宇乃御子聖徳太子
日向国孔雀寺へ遊ばされ候ハ西暦より紀元二千六百の
八幡宮乃神宝幸徳勝波豊栗神軍と引幸ち
彼一国と征し書し給ふ敵と亡しかりうばら
八幡乃御宮へ此度の合戦に多く其人と敵しは
有難き事と存じ奉り候ハ神祇まし〻これ仏国へ
ゆくゆくハ御とうりひいらし技業記に
見えたり三千世界乃御祭を生いたて
いたゞきたてまつり候と仏ハ
ゆくゆくハ

此事ハ つらく人を同仏ゆくゆくハ神楽合編に
日本八月十六日敵味方合星百鍬芸楽宮本国言
羅西郡と云ふ世り年中の行合を新年御
世よりかゝて神祇の祭をきくいたしいたるとゆくゆくハ
○今宮ゆくゆくハ神祇の月祝者ハ月々
ゆくゆくこ五月ゆくゆく年人踏宮乃踏と祝ハ月々
椿ハ山姫椿ハ山ゆくゆく今月月と祝ハ大なる事
庭ハ世より参ハて御人又人を孫ゆくゆくと
古楽庭ハ嫁姫乃如何御人の中秋月月祝
ゆくゆくハ此と仏ゆくゆくと何時ハ御神楽をあ

まゆみのうこしにもとをかけ侍りける

はるかぜのはなのかをるとはるのよの
ゆめにもとをかけ侍りける

はるのよのつきにかをるはなのかを
ゆめにもとをかけ侍りける

歌湯詩。歌月詩序。

別墓電大樊雷。歌月。紀後人歌与後侯書。歌。秋之
於対。後夏先冬。八月於蛛。季妃孟秋。十五於。秋。又月
之中。稽於天文。別定長短。均取於月数。別城色圓。況
埃壘不詩。大定無。歌。婦徊徘。毎上深昇東林。
入三面樓。肌骨与之殊流。神氣与之清冷。

○書云。夏六月。歌。

金水性相生。五行分。基事。別知天地間。相感各〻動。
此以金還生。月因秋之清。氣動。仮之性。人雖不生情。
後方今集。天原乃御所

月こそは月かすみてはひかるなれ月のかすみはうらなし

新勅撰集。中道法師

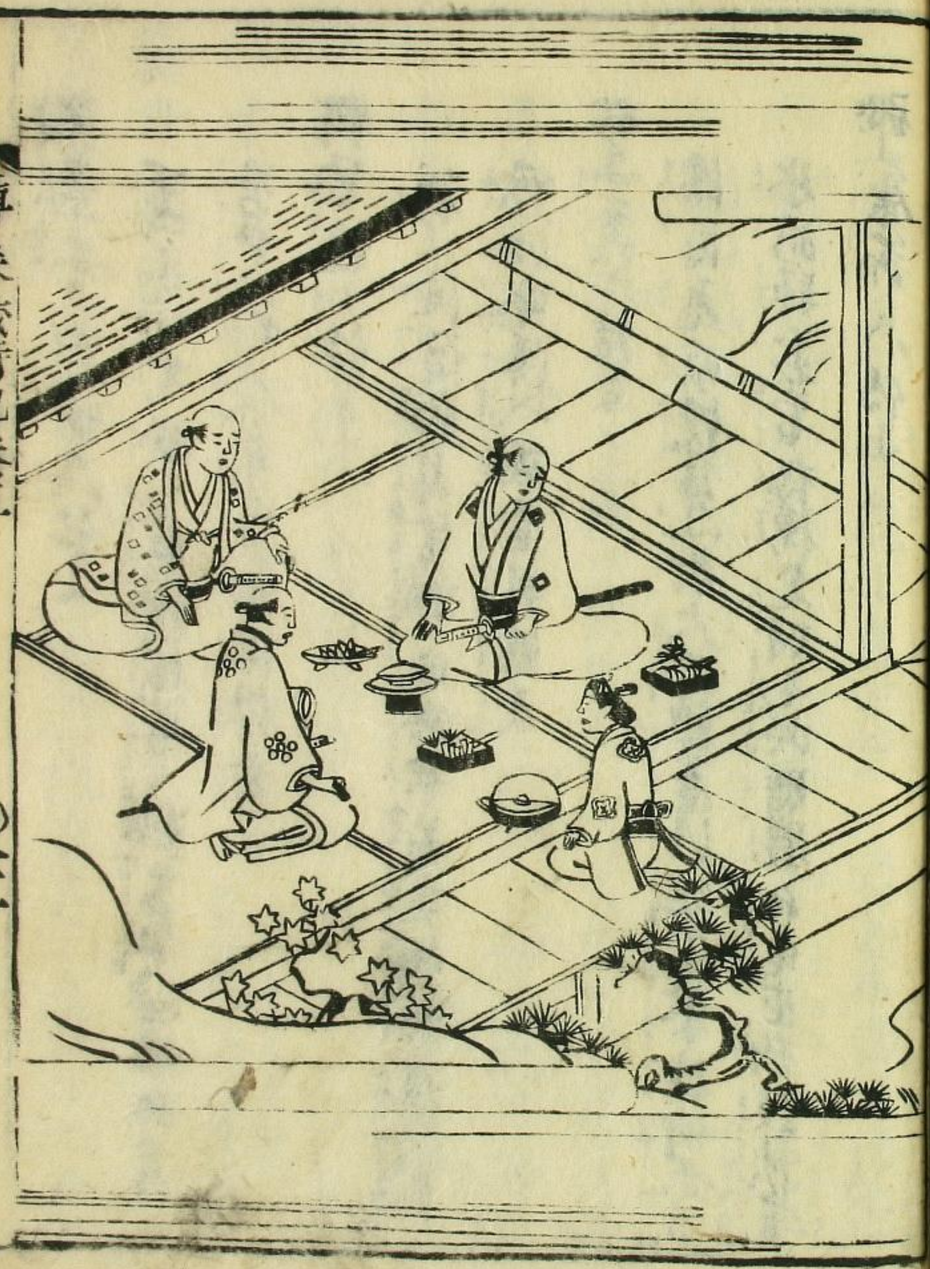
うらみわと妹乃出てしぬるこそはひかるなれ月かすみ

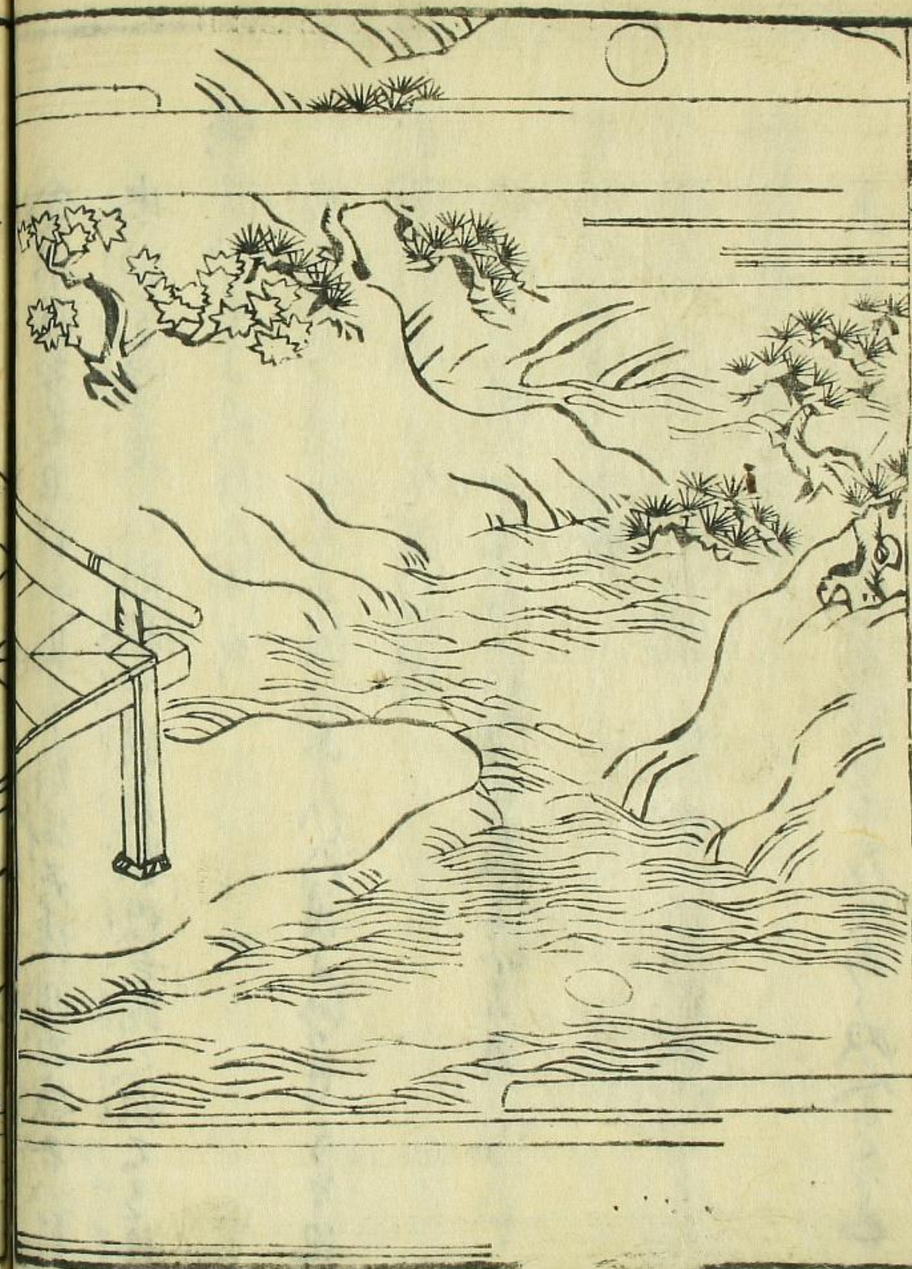
拾遺集。源親房

白雪の又降ぬれば月のかすみのうへ

金葉集。源親房

さやけさはいとひなくして月新と云ひて人ぞとこそ





清景安の中秋の詩乃ち

万つる秋宮掛玉盤搜構者て起る事。四海此月

若是邪人自今看冷眼看

劉曾繞の詩

徹て池辺伯月生。邪遮此夜易天明。酒に取

秋江水深人網臺就眺更

杜子美の詩

海月光明鏡集仙折大刀新蓬山攀桂仰不留

水晶疑雪雪横見羽毛此時眺白兎垂欲数秋毫

邵康節の詩

一年一度中秋夜。十度中秋九度陰。未遇玉須面

花中。要明仍候天心。重照更情非淺。不眺

観時意更深。清光古人詩句好。何堪千里共如今

○今夜興盛寺と尚い花堂にて酒のこと多しと

月令度義は見えてより又いとく牡丹と称し載る事

今日にて宿をよ宣しく決る代根を浄く洗へ

酒とはく洗へハ花物なり

二十七日　孔子乃生れ給ひ日なり　それ孔子を祭る式が法式なり

晦日　陰雨

そろそろ社日なくて三秋乃後者又の戊日土乃

祝は二月の邪よ　世俗雅と云ふ説天と
なる　紙とあかして　紙とあかして　日月乃参と
地祇乃祀とをれをの参　水の淫祀とあるへし
乃改と云てひりろとの風俗と遠く表
秋は社日の祭をへる事也　中郷も八九月の
比土地の神と参る礼とかく秋社とかくそこ
ちの淫祀多しひとへや村里で
とかく参の日かれも農商代寄へ他村より来る
ぬも饗餐乃客多く来るほとひとの餐饌と財と
費しかあるとやはりもの祭り　此俗湯殿国
中此参日に一日と用べしと命せらるる元ちの能法外
なりへしと世俗は八九月土地乃神と参る時饗膳
をと製して客を餐し親族鄰里よとる事
ひろもろとまた社日ハ秋社ハ春社酒饌
を秋社へ社酒饌を春社へ参る事
上旬の日と指て参詣をへしと
稀分乃日考妣先祖乃神と参
より後陰氣日ゝ出しへ日を
知りて日夜ひとしき寒暑
乃雨と云所へ降ぬ

月末ニ成郊野ニ趨領ス〳〵

此月家地所の人を移穀と業して種を八重蒔ス〳〵

又此月家地所の人を移穀と業して種を八重蒔ス〳〵

此月強風有の時人多く風の威して毒性強く風と遊〳〵

宅中ニ上旬ニ至て花蔓蕾と萌〳〵宅中ニ蠶多し

くやく性ちよ〳〵しうしうとす月うゆうとうしてすく業ス

蔦蕓薇蕨ニ上旬の初萌〳〵蔦蕓は初てくうの為ニ

中旬ニ入て蕨ニ二月に成て中旬ニ入て蕨は新

に成り蕨葉は初て生ずるすべく中秋の時性〳〵

蕨ニ入て蕨ニ成て中旬ニ入て蕨の土

あつ成れいまし〳〵ずさし〳〵土ニ成れいまし世ニ成やうに成ろ

し〳〵ずさしはたかはひとうに成ずさしてとうく

べし〳〵成れを苗ずして成ずさしてとうく

成蕨ニ成ずさしと收蕨〳〵桃氏蕨と成ずさしとバつまくもろ成ずさ〳〵

たねよりこの世蕨ずして蕨脳〳〵蕨ニ成ずさ

てとく〳〵〳〵蕨ニ成れは出ずさし又成蕨ずもの成ずさ

成收蕨〳〵

蕨〳〵成ず業と脳して後蕨して肉と剥ずさして去て收

蕨〳〵ずさしずさと蕨ずあ〳〵事蕨とは用べく成振去

〳〵成来ずは和宅ずようにて家ずようには蕨せずと

こうれ性なり

八月はじめより採へし　なかはより葉黄ばみ　元採根多し　八月採去

秋枝葉枯　粘津洞　洞なる下方秋採宜　敢実葉黄各

注　葉朱熟也　そもそも二月乃新芽

九月竹とれハ堅す　月令廣義ハ六月又竹とれハ不堅とあり　麦　搗臼　米　切こと

なりて　煙　へし　元搗臼米不軽　法うるき皮を失

みくやるその煙みく米と　あれハ永く不軽まる

蕎麦稗乃灰汁　洗うをよし　洗ふを久しく

腐しなるを出さるなら　幹　綾栖　矢藁　木刀　弓　矢

八月ゆ搗　稗と　收へし　布と　作し　紀　と　用ひ　須布

と染　染　と　乃　乃　乃　乃　乃　乃　乃　乃

九月天寒　冷なり　多く　生果　と　食　ふ　生　蒸　雑　搗　芽

生　雪　雑　子　雑　と　食　ふ　ら　れ　又　萠　芽　と　食　ふ　ら　ん　を　忌

寒　雪　雑　子　雑　月　月　廣義ハ　月　と　り　重　及　七　織　ハ　ら　ん　乃　法　乃

流　水　と　絃　事　なり　し　人　と　て　瘧　脚　歌　と　為　せ　む

八月の　古　候　才　一　隠　屋　来　才　二　京　雪　地　才　三　雑　子　義

義　大　白　義　乃　三　候　なり　来　白　雷　妃　後　才　九　雑

雑　雑　戸　来　大　水　妃　涸　大　秋　分　乃　三　候　なり

白　霧　屋　五　十　二　刻　十　分　秋　半　七　刻　五　十　分　秋　分　昼　五　十

刻　秋　五　十　刻　月　令　廣　義

九月

菊月 歳事記に九月の異名は季秋 玄月 ○九月の中 ○九月の異名に菊月といふ ○九月乃和名を長月といふ 長月の略也 [illegible]

朔日 今日より八日まで袷衣(あはせきぬ)を着る

八日 沐浴

九日 重陽とは月と日と二つながら陽の数なる故に重陽といひ又重九ともいふ 国俗今日より菊花を…
又今日栗子飯を食ひ菊花酒をのむ事あり
[illegible]
何の苑と重陽の宴といふ事をしるすれば事根源に

あらずりことに 其ものやまのなき事ハなくしてありぬ也
しるしハ今日高きに登りて遊観眺望す
続斉諧記によれば汝南の桓景といふもの費長房にしたがひて遊学する事年久し 長房桓景に語りて今茲九月九日汝が家に災厄あるべし 家人をして絳嚢をぬひて中に茱萸を盛り臂にかけ山に上りて菊酒をのまば此禍消ずべしと 桓景其言を信じて九月九日に家をあげて山にのぼりて夕べにかへりて見れば家中の鶏犬牛羊ことごとく死

死なずもあらこれとゆかるこれ海ら命よ生とれりせ
ばより無れ人九日よ毎年ごとに菊酒とのを
婦人菜萸囊と第ん中に五
種紙よりいとく九日菜黄と紙ひきるよの分り菊花酒をうむ
費を房極系よ実と数の雑と数くとくろ入れ
西京雑記よ戚史人の侍児賈佩蘭字やはりて九月九日に茱萸
と食ひ菊花酒とのむ此事ハ人をして寿を
ながらへしめ又月令廣義の仙書
ちめきそよ出ずの極系よ始ることなり
と引て之ハ菜萸と薸邪囊と延寿
囊とこれ赤の九日ハ二つ物と好りて酒九月の見と消
をはらんと思ひて
用ゆる用法ハ九月九日律曳射ハ南り数九ま

る系よ俗にはと尚んで菜黄房とおりて酒よ
挿む元亀三乗と薸邪囊と事せぐ
とハ見なん西法ハ又今日菊花酒とのみ
長寿のあり〜むを賞法菊を飾る酒花を薸囊を
なりよ茱萸にゃ〜〜これと嬢し来年九月九日よ
知らく取おしてこれと外囊よこれと菊花酒とのいは
西京雑記よりこれ
○五節供中人日と漢く上巳端午七夕重陽八月
寿ま祝ふる西北俗ハ正月日これ斉ま
ちく陽数よあるとこれりこれ古人陽と尚ぶ

なりと世の人のこれを山伏平しさとなる人
のことばをつとめ屋しなりの後くるの義
とも云ふ説明玉屋系統女植蒔ものとなる植しし
てしかもとすその妄説珍しきなり
後平載集よりの説引出典俗
のまれ惜しみて九月にて代まもくれ勇ましうる
義歟百ものしりの説
去月やきみと酒勇ましの植ものを
陸奥雲雲の産物乃説
一見花見月蓋蕭條絵数不植秋雨のたのしこのん

烏帽子猫侍の西風満眼愁

九月の九日の詩

屐齒聯聯印蒼苔　山家帽無斜西風晚月
催黃菊　妙心花笑蜀花開

杜牧の九日の詩の詩ハ

江邊秋到屋初花興客機疎世慵逢
野老笑蜀葵開頻插滿歸時醉他將
酒面醉佳節
[illegible]

猫侍の歌

○今日義の紀氏の歌ハ[illegible]味[illegible]と[illegible]て第十[illegible]

義紀の九月十三夜一紙弁九日より十月会義紀[illegible]
十日　四位信今日　り見衣[illegible]三月晦日[illegible]
いにしへより[illegible]
十三日　後信今月紙書[illegible]中秋[illegible]
義紀　後又八月十五日九月十三日ハ[illegible]
清明なる[illegible]月と[illegible]良[illegible]
[illegible]
又月ハ大小あるハちがう[illegible]
[illegible]月と[illegible]
[illegible]

さ[illegible]も八月ハ流よ十五夜乃月を賞しぬれハ昴に
月ありのちくしといひ又天道を満くことく義を取
て九月を用ゐる也とも此月を数ふとも詠
こしに名たる歌とハ見え侍たり十三夜乃
月代[illegible]せし綺にこれあり又菅丞相府の紀
長谷雄か菅家[illegible]集に詠る詩を一首
のせたり九月十三夜乃作とも云ふ是は菅家後集に八九
月十三夜乃秋とも[illegible]せ八月よむすを賞したる事
こともありしも是又月を[illegible]て詠そよ一二代
集にハいまだ見え侍らず[illegible]の此月の詩

夕さり此大納言より[illegible]ありて十三夜乃月
のいさゝかれ居るに清[illegible]其の心をとて歌
よしとりて[illegible]ありて[illegible]も此夜此月を賞
せしまゝや　我人乃いたく[illegible]乃十三夜詩に[illegible]此月を賞
十三夜月を賞する詩[illegible]
今まさく月を数ふるや

金葉集　太宰大弐長実が九月十三夜の月を詠る歌

くもりなき鏡と見ゆる月のはなにそ[illegible]世人もあくしれ

千載集　読人不知

妹此月[illegible]の秋にて[illegible]一夜をは[illegible]

風雅集[illegible]

くれの妹尼乃ぞうまたかねさまをまつらこと[illegible]

義忠通号法性寺殿九月十三夜数月待よ

月胸寂月[illegible]清屬家秋[illegible]匠[illegible]清[illegible]

清[illegible]秋家[illegible]経[illegible]和尋十三夜[illegible]月[illegible]

百年完[illegible]貴今[illegible]侍前[illegible]月清明[illegible]

晦日 [illegible]

七月部[illegible]

上旬小[illegible]

[illegible]

十月五後十二月初[illegible]

[illegible]九月[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七月牡丹芍薬及竹花果木[illegible]

今度義[illegible]農政全書[illegible]果木[illegible]

ゆ[illegible]九月乃中[illegible]後樹[illegible]

いくまいとかいけるかたとかハ肥土を入水と混へ
一次年正二月ニ稲穂へ（さて二月の新に要し）
此月粟と收蕎麦し月今度穂よりいろく五度後ニ粟と
取水多に用ニ入くうくるものを去ハかりし海と
炒く冷し新蚕ニ入汁一ニ粟一ニ豆ニ塩ニ一二
ほたく一二石入る多きハ炒し作麦を地くハいきと
と作れおしろ乃ごくなる地わくハを蕎へてきれ
いなる地ニ大れ蚕とうつむきに蚕なり海ニ
つるるとき乃れ又塩水ニ一二枝浸し取おしはを
地麻を挿せ蚕ニ入蚕へしきを又脱出山中乃種への

法ハ生粟と二月月小りを後熟考く又月小り
蚕ニ收ハとをら蚕ハ出くるりて味噌なりくなり
又大粟と生ふく炉へ蚕ニハ粟乃茅生をとる五ニ
やきをとあて蚕ニ入ニ日ハ粟ニ入ニ日ハ蕎麦と
用ニ市ニ粟ハ出るかど小完と一あけ蚕のハ
小をあさらさ海ニなりしハの方ニ球ニ付蚕へ茅
生せす久しくこ乃ゆるなり又蕎麦と蕎ニ入ニ
用ようへ蚕ニくををうし
此比米穀と米炉へ一用多し
此月量と合るかたられ瘟疫とかたれ中蕎麦とて人へ穀を

傷寒と換す蓼を食へば食へば次細と食へば次細と
多く食へば次大肉とくへば人の神書と傷寒の相
と為して痢疾と為すべし　月令廣義
叢書集成
九月の六候　寒一潛鳳來賓　寒二雁入大水為蛤　寒
三菊有黄華　寒四蟄虫坏戸塞乃不出　寒五
水泉始涸　寒六蟄虫咸俯　寒七天氣肅清　寒八
地氣閉塞　寒九閉藏至四十七刻五千分　夜五千二刻十分　晝四十
五刻五千分　夜五十四刻十分　月令廣義

日本年号考証巻之五畢

早稲田大学図書館
011888001630